

大腸癌肝転移症例におけるCD133発現の免疫組織学的検討

著者	岸川 純子
学位授与年月日	2016-10-26
URL	http://doi.org/10.15083/00075379

審査の結果の要旨

氏名：岸川 純子

本研究では、大腸癌幹細胞マーカーの可能性が示唆されてきた膜タンパクである CD133 の肝転移巣における発現とその予後との関連を明らかにすることを目的とし、同時性肝転移を伴う大腸癌症例 88 例を対象として免疫組織学的に CD133 の発現を検討し、下記の結果を得ている。

1. 大腸癌原発巣において CD133 発現が陽性であった症例では、肝転移においても CD133 が発現している症例が有意に多いことが示された。また、大腸癌原発巣における CD133 陽性率は各ステージ間で有意差を認めなかった。原発巣・肝転移巣いずれにおける CD133 発現も、各臨床病理学的因子との相関は認めなかった。

2. 大腸癌肝転移症例の生存率は、原発巣における CD133 発現状況による有意差を認めなかったが、肝転移における CD133 陽性症例は陰性症例と比較して有意に予後良好であった。

3. 大腸癌肝転移における CD133 陰性症例は陽性症例と比較して、肝以外の臓器における再発が有意に多かった。特に肝以外の遠隔転移再発および局所再発について CD133 陰性症例が有意に高い再発率を示した。

4. 無再発生存率および全生存率について、肝転移における CD133 発現陰性は独立した有意な無再発生存率予測因子であった。

以上、本論文は、肝転移における CD133 陰性症例が予後不良であり、その機序として肝以外への転移再発が多いことを明らかにした。本研究は、大腸癌の増大・転移への関与が示唆されて

いるものの、分子機序が明らかになっていない CD133 の今後の研究の発展に寄与することが期待され、学位の授与に値するものと考えられる。